2022 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
教育学部　子ども発達学科	教授	辻　正人
最終学歴	学　位	専門分野
愛知教育大学(社会科)	学士	

Ⅰ　教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

（理念）

人間形成の大切な時期を過ごす子どもたちに、情熱と使命感をもって関わることができる教員志望の学生の育成を目指す。

（目標）

・採用試験の全員合格を目指し、意欲を持って頑張れるよう支援する。

・教職を目指す学生に「使命感や実践的指導力」等を身につけさせていく。

平成 29 年 11 月に策定された「愛知県教員育成指標」では、養成段階における「愛知県が求める着任時の姿」が示された。これを受け、課目外においても現場体験をできる限り多く取り入れ、資質や能力を培っていく。

（方針）

・意欲をもって採用試験に臨めるよう、希望自治体の情報分析を十分行い、ポイントを絞った繰り返しの学習に重点を置いて進める。

・「着任時に求める姿」に近づけられるよう、効果的な現場体験や学習等を設定する。その際、教育委員会や名東区内の学校との調整を十分に図る。（計画）

① 特別講座(教職基礎・教職実践)を充実させるため、前年度の状況や傾向を分析したものを資料化する。過去問への挑戦とともに、その参考資料を基に、繰り返しの学習を進める。

② 東邦プロジェクト B(小学校授業参観)において、参観の視点を明確にし、教師の言動や授業の展開を学ぶ。

③ 学校や子どもの実情を知り、学校や子ども理解を深めるために、名古屋市の先進的な教育実践校や名東区内の学校行事参観を行う。（指導力向上講座の充実）

○担当科目（前期・後期）

（前期）

教職対策特講（最新教育事情Ⅰ）、教職対策特講（教職基礎Ⅰ）、教職対策特講（教職実践講座Ⅰ）

（後期）

教職対策特講（最新教育事情Ⅱ）、教職対策特講（教職基礎Ⅱ）、教職対策特講（教職実践講座Ⅱ）、東邦プロジェクトB

○教育方法の実践

①については、学生が志望するすべての自治体の要項や過去問の分析集を収集し、状況や傾向をまとめ、対策を練り志望自治体を決定するために行う個人面談で使用した。また、新教育時事など項目を絞った問題を作成し、繰り返しの学習を行った。特に、穴埋め問題対策には重点を置き、そのために作成した「毎日の学習」（第 1 弾～第 4 弾)に挑戦させた。

②については、参加学生が 5 名であったため、訪問小学校は 1 校となった。5 名の内 3 名が教育学部、2 名が経営学部の学生であった。そのため参観の目的や観点については全体指導し、実際の参観については、2 グループに分けての参観とした。教育学部の学生の内 2 名が 4 年生であったため、中心となって参観後の協議を進めた。その中で、経営学部の学生は、驚きが多く、教育に対する関心を高めることができた。見る視点を明確にして臨む姿勢は、今後の経営部門で生かせるよう指導をした。IDT 機器を活用した授業が多く、どの学生にも教師のきめ細かな指導の重要性を感じさせることができた。

③については、指導力向上特別講座として位置づけ、ICT 教育先進校である「山吹小学校参観」、学校行事参観として名東区内の小中学校の「土曜開放日」や「薬物乱用防止教室」の視察を実施した。それぞれの視察の目的を明確にして参加させたことにより、充実した参観になったことが、アンケート結果からも読み取れた。特に、「山吹小学校参観」については、名古屋市教育委員会の委託を受けての教育実践ということもあり、子どもたちが自分たちで進めていく学習を目の当たりにし、個別最適な学びの一例を知ることができたと考える。学校行事参観では、名東区校長会のご協力をいただいての実施であり、今後も協力体制を続けていきたい。

○ 自己評価

①については、十分達成できた。

②については、おおむね達成できた。

③については、十分達成できた。

【②の課題】

全学対象の「東邦プロジェクト B」であったため、経営学部の学生の参加があった。目的としては、教職を目指すための講座であったため、経営学部の学生にとって意義はあったものの負担もあったと思われる。教師の子どもとの関わりや効果的な授業展開を学ぶことに主眼を置いているので、来年度については対象を限定した実践としたい。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

学生に自信をもって採用試験に挑戦させるとともに、教員としての力量を高める効果的な特別講座の在り方を探求する。

○目標・計画

（目標）

全国的に教員採用試験の倍率が下がってきているとはいえ、本学の学生にとっては高い壁となっている。自信をもって試験に臨ませるために、知識・技能を高めることはもとより、効果的な学習方法を身に付けさせることも必要である。TAC による特別講座との連携を図るとともに、計画的な模擬試験の受験や過去問を中心とした繰り返しの学習を展開し、学び方を学ぶ充実した特別講座の在り方を探っていく。また、併せて指導力向上を目指した特別講座を設定する。

（計画）

① 学生の受験希望自治体の試験傾向を分析する。

② 従来の TAC 特講を「一般教養重点特講」として新たに位置付け、教職基礎との違いを明確にする。

③ 日々の学習成果を確かめるために計画的に模擬試験に挑戦させる。（その効果を探る。）

④ 関連のある問題を繰り返し解くことからポイントを絞った学びを進めていく。
（ポイントを絞り集中的に学ぶことに効果があるか探る。）

⑤ 名古屋市や名東区の学校との連携を密にし、先進的な授業や学校行事を参観し、学校現場の理解や創意工夫した取り組みについて学ぶ。

○自己評価

① については、十分達成できた。

② については、おおもね達成できた。

③ については、十分達成できた。

④ については、十分達成できた。

⑤ については、十分達成できた。

【①の課題】

過去の学生の採用試験結果を分析したところ、一般教養と小学校全科の成績が芳しくないことが明らかになった。そこで、TAC 特講を「一般教養重点特講」として位置づけ、専門的に学習する方針をもって実施した。しかし、年度途中に特別講座名の整理のため、「一般教養重点特講」を「教職対策特講（教職基礎Ⅰ）」として実施した。TAC としては講師配置に困ったようであるが、教科等が偏ったり、講師が固定化したりする課題が明らかとなり、専門とする講師を招くことができなかった。こういった部分でのフォローを教職支援センターでどのように行うかが課題となっている。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

教職支援センター運営委員会委員長として、事業全体を掌握するとともに、センター長として、センター業務をさらに充実させることが役割である。

（計画）

① 教職支援センターとしての授業展開に責任をもって臨むため、幼小保・中高教職課程部会との綿密な連携を図る。

② 教職支援センター主催での教採合格に向けた特別講座と指導力向上に向けた特別講座を充実させる。

③ 文科省による教職課程「実地調査」の可能性が高いので、その準備を進める。

④ 最新課題である「令和の日本型学校教育」の研修会を実施するとともに、ICT 活用指導力向上に向けた「ロイロノートの活用講座」等を設定する。

⑤ 複数免許取得等の課題解決に向け、他大学の状況を含めて情報収集に努める。

○学内委員等

教職支援センター運営委員会、幼小教職課程・保育士養成部会

○自己評価

① については、おおむね達成できた。

② については、おおもね達成できた。

③ については、十分達成できた。

④ については、おおむね達成できた。

⑤ については、十分達成できた。

【①の課題】

教職支援センター運営委員会内での事項として「幼小保・中高教職課程部会」からの報告場面を設定し、情報の共有を図ってきた。しかし、審議事項として決定した内容が部会に十分伝わっていないと思われることもあった。例えば、学生への周知として YOPOS を活用しているものの、TOPOS はあくまでも告知であり、学生への積極的な働きかけが十分でない結果、特別講座への参加が少ないという状況であった。教職支援センターとしての工夫は当然求められるが、教職支援センター運営委員会で決定したことは、関係教員として取り組まなければならないことであると自覚した対応を求めていきたい。

【②の課題】

指導力向上特別講座への参加者が固定化していることに問題がある。教職に就く学生にとって教師力をつけることは、各自治体が示す「着任時に求める姿」に繋がる意義ある講座であると捉えている。採用試験に合格した学生からも高い評価がなされている。特に、特別講座を受けていない学生へ裾野を広げていく必要がある。指導力向上特別講座の内容と学生のニーズを鑑み、更なる工夫をする必要がある。教職支援センター長として、視野をさらに広げ、関係教員の共通理解に基づく共通行動が展開できるよう努めていく必要がある。

【④の課題】

新教育課題として取り上げた内容は、採用試験にも出題される可能性もあり、参加した学生も真剣に臨んでいた。また、各学校で使用されているソフト「ロイロノート・スクール」の演習は、(株)ロイロの専門家であり元高校教員の方であったこともあり、学生の実情を掴んだ分かりやすい説明のもと大変中身のある学びとなった。もっと時間が欲しいという声もあったが、学生はもとより、教員の方からも高い評価をいただいた。教職課程の 1 年から 4 年までを対象にしたが、残念ながら参加したのは特講の学生だけになってしまった。学生への周知とともに、演習の時間の更なる確保に向け工夫が必要である。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

サービス・ラーニング(授業科目)を通じて、学校・園などへの訪問を進める中で、名東区内の幼稚園・保育所・小中学校・児童福祉施設との連携をさらに深めていく支援を行う。また、サービス・ラーニング委員会の主催する事業を支援し、地域連携を図っていく。さらに、科目外の学校支援ボランティア活動の紹介に努め、学生に学校等の実情を掴ませる機会を提供する。そのため、名東区の校長会等との連携をさらに深めていく。

（計画）

① サービス・ラーニングの成果を報告しながら、学校・園など諸機関の行事の支援を進める。

② 名東区子育て支援ネットワーク協議会のメンバーとして、担当教員とともに、地域の社会貢献を図るとともに、名東文化小劇場・名東図書館での行事を支援し、関係強化を図っていく。

③ 教職支援センターニュースの発行や教職支援センター掲示板への掲示を通して、学校支援ボランティアの紹介をする。

④ 名古屋市教育委員会や名東区校長会との連絡を密にし、互いに協力する体制を続ける。

○自己評価

① については、十分達成できた。

② については、あまり達成できなかった。

③ については、十分達成できた。

④ については、十分達成できた。

【②の課題】

教職支援センターとして、当該協議会に積極的に支援をしてきたという実績を残すことはできなかった。教育機関との連携は、学生に広い視野をもって教育を考える機会となることから、今後の関わり方について考える必要がある。

V　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

・最新教育情報を把握し、学生の指導に役立てる方策を考える。

・教職課程の教員や学生を支援する体制を再構築する。

VI　総括

2022 年度は、コロナ感染に関する規制も緩和され、従前のような活動が展開できるようになった。とりわけ、学校現場を視察することで教師力を高めたいと考えていたこともあり、すべての計画が予定通り実施できたことは喜ばしい。

本年度の目標として、「採用試験合格・使命感や実践的指導力・着任時の姿」を掲げ、教職員一丸となって努力してきた。

採用試験対策として、繰り返し学習の徹底を図り、自主勉強の場面も設定し、モチベーションを高めることに努めてきたことにより、脱落者を出すことなく、素晴らしい結果を生み出すことができた(特講受講者 8 名中 7 名が採用試験合格、1 名が愛教大特別支援教育専攻科)。

また、教職課程として掲げた「情熱と使命感をもって子どもと関わることができる教員志望の学生の育成」は、より多くの学生に子どもや教育現場を見て、体験して身に付けてほしいという基本的考えを基にした理念である。その実現に向け現場体験を重視した「指導力向上特別講座」に力点を置いてきた。この講座に参加した学生からは、高い評価を受け、教員になってから役立てたいという声を多く聞いている。参加学生の固定化については、課題の一つとして関係教員の協力を得ながら解決していきたい。さらに、学生のニーズや今後の教育の動向に合わせて、特別講座の内容をさらに充実させていきたい。

どんな教員や保育士になりたいかを明らかにした目標「私が目指す指導者像」をもたせることは、自らの取り組み考えさせ、意欲を持続させるために大変重要な意味があると考える。次年度に向けては、教職支援センターの目標と学生一人一人の目標をリンクさせ、きめ細かな指導ができるよう努めたい。

以　上